



## 地震への備え

日本は、地震の発生が世界の約1割を占める世界有数の地震国です。

南関東におけるマグニチュード7程度の大地震の発生確率は、今後30年以内に70%程度とされています。

地震が起こると、揺れによる建物の倒壊や火災の発生による延焼が大きな被害を引き起こす可能性があります。

地震に関する地域危険度測定調査(第7回)に基づき、東京23区において建物倒壊・火災危険度・災害時活動困難度を考慮した総合危険度が5段階中4、5にあたる地域を「危険度の高い地域」としています。

荒川区内ではおおむね危険度は高く、南千住4丁目8丁目は危険度1で低いのですが、荒川3・4・6丁目、南千住1・5丁目が危険度5、荒川4・5・7丁目と南千住6・7丁目危険度4と危険度が高くなっています。

では、地震への備えとしてどのようなことに心がけたらよいのでしょうか。緊急地震速報を聞いた時、ゆれを感じたりしたら、すぐに自分の身を守り、行動をとります。低い姿勢をとり、まわりにある座布団やクッション

などを使い、頭を守りましょう。外出中であれば、かばんや上着、お店の買い物かごなどを使うことも考えましょう。また、寝室や人の出入りの多い場所にはできるだけ家具類を置かないようにしましょう。

ゆれの後、割れたガラス、倒れた家具、ガス漏れ、火災などを確認し、行動する際には、割れたガラスなどによるケガを防ぐため、手袋、はきやすい靴(なければスリッパや靴下)、ヘルメットなどを身につけましょう。

ケガをしていなくても、大地震でパニックになった時は思うように声が出ない場合があります。そのような時に備え、笛や防犯ブザーなどを身近に持っているのと役に立ちます。



携帯電話などにつけておきましょう。

電話が混雑して使えない場合は、NTTが開設する災害用伝言ダイヤル「171」や携帯電話各社の災害用伝言板サービス、災害用音声サービスなどの連絡手段があります。

緊急時の連絡に必要なことをまとめ、持ち歩くようにしましょう。自分の家の電話番号や連絡を取りたい人の連絡先な

どを伝えるための緊急連絡カードを作成しておきましょう。いざという時に落ちておいて大事な人と連絡をとることができません。電話のそばに置いたり、お財布や健康手帳などと一緒に携帯したりしておきましょう。

地震が発生すると、電気、ガス、水道などのライフラインが止まったり、食料品などの生活用品が手に入らなくなったりするなど、生活に様々な不自由が生じます。

薬の服用をしている方は「手元に残っている薬の量」、人工呼吸器や自動吸引装置などの医療機器を必要としている方は「充電状況と使用可能な時間」、食物アレルギーなどで食事に配慮が必要な方は「アレルギー対応食品」など、命にかかわる大切なものが、どれくらい手元にあるのかを確認しましょう。

必要なものをまとめた非常持ち出し袋を実際に持って移動してみましょう。重すぎて持ち歩くのに支障がないか、確かめておきましょう。

大切な情報を逃さないために、電気が止まった時にも使用できるラジオ(電池)、携帯電話、携帯のテレビを活用しましょう。

「天災は忘れた頃にやってくる」備えあれば憂いなしです。